

## 札幌市立発寒西小学校の取組【雪に関する教育課程】

### 1. 研究のねらい

本校は、札幌市の西部に位置し、住宅地が多い地域である。特に冬期間、子どもは外で活動する場が少なくなる。本校では、生活科や体育（スキー学習）はもちろんのこと、第4学年の社会科でも除雪に関わる学習に重点を置き取り組んできた。また、総合的な学習の時間においては、3年「発寒自然発見隊」、4年「発寒昔探検隊」、5年「札幌再発見」、6年「日本の今を生きる」の学習の中で、冬の自然の様子、それに向き合う人々の営み、そして冬の防災などについて学んできている。さらに、サタデースクールでは、保護者と地域の方を巻き込み、みんなで雪の結晶観察を行い、大変好評を得た。一方、本校校区は昔からの住宅地であり、道路が狭く除排雪の問題は切実である。場所によっては道路が雪でかなり狭くなってしまいうなど、雪との付き合い方について見直しが必要な面もある。雪とよりよい共存を目指そうと意識できる子どもに育てたいと考えた。また、雪が大好きな子どもの発想を生かし、自分自身が楽しむことを大切にしたい。更に、冬を苦手としている多くの大人に、自分たちが体験した雪の楽しさを伝えていく活動を考えた。

### 2. 取組内容

(1) 第4学年 総合的な学習の時間「発見探検、世界一の札幌の冬」の取組から

#### 学習の課程

- ①「世界一の札幌の冬」を各自の問題意識にそって調査（降雪量、除雪体制、雪の質、スキー場、滑り止め、防災…など）
- ②発見した「世界一の札幌の冬」をマイブックにまとめて発表
- ③グループで、「世界一の札幌の冬」に関するプレゼンテーションを作成
- ④保護者や地域の方などに発表し、札幌の冬のよさについて理解を深め、より一層豊かな冬の暮らしを追求

【手立て1】雪の観察をするために

購入したもの

- |              |               |     |
|--------------|---------------|-----|
| ・ プラルーペ      | 10倍           | 40個 |
| ・ ベニヤ板       | 110×160×4(mm) | 40枚 |
| ・ 綿ベッチン布     | 1500×900(mm)  | 1枚  |
| ・ キャリングプラケース |               | 2個  |
| ・ 中仕切りケース    |               | 4個  |

以上をプラケースに収納し、持ち運びしやすくする工夫をした。一目で個数を確認できるのもよい。本校は第4学年に4学級あるが、これにより用具の受け渡しがスムーズになり、効率よく雪の結晶を観察することができた。



## 【手立て2】雪について知るために

有益な情報（雪学習 NEWS—札幌雪学習プロジェクト事務局 発行）

これまで『雪学習 NEWS』では、「雪の結晶観察」「雪冷房」「除排雪」「転倒防止策」などが掲載されてきた。子どもにとって宝の山である。



### (2) サッポロサタデースクール「冬の陣」の取組から—1月28日（土）

#### ①雪にちなんだ楽しいゲーム

チームで力を合わせて雪を積み上げ、その高さを競う「スノータワー」を行った。雪を集める役、運ぶ役、積む役など役割を分担し、協力する喜びを味わうことができた。その中で、「湿った雪は固まる」「サラサラな雪は積むのが難しい」などと、雪の性質を実感した。



#### ②雪の結晶観察

今回購入したプラルーペを使って雪の結晶観察会を行った。「雪の結晶は白いのと思っていたけど…」「いろいろな形があるよ」と発見し、つぶやきながら熱心に続けていた。1年生から6年生までの児童が参加していたが、それぞれに印象深い経験となった。



## 3. 成果と課題

### (1) 成果

- 継続して「冬」「雪」に関して取り組んでいるので、特別な取組をしているという意識ではなく、当たり前に行う活動へとさらに前進させることができた。
- 今年度も関係諸機関や、研究者、地域等との連携を深めながら実践に取り組むことができた。札幌らしい特色ある「雪」の学習は、地域、関係諸機関、専門家等との連携で学びが深まり、実感の伴った理解になることが再認識された。
- 保護者や地域の方々に向けて発信する活動を通して、子どもは自信と、家庭や地域との一体感をもつことができた。



### (2) 課題

- 学年、学級、小グループとしての活動で、課題をもち、その課題を解決する方策を定め、分かったことをまとめ、発信するといった取り組みができたことは評価できるが、まだまだこれから取組を続けていくことが必要だと考えている。  
雪と触れ合うことを楽しみながらも、雪問題の解決に向けて取り組んでいく「自立した札幌人」を育成する具体的な手だてを今後も考えて行きたい。